

# 日赤道看護大 根本教授

## 冬の避難所研究 論文に「技術賞」

### 寒地シンポジウム

雪や寒さに関する研究成果を発表する第35回寒地技術シンポジウム(北海道開発技術センター主催)で、日本赤十字北海道看護大(北見)の根本昌宏教授(49)の論文が、寒地技術賞(計画部門)を受賞した。厳冬期の避難所運営訓練を基に、段ボールベッドなどを活用した暖かさを保つ方法を検証し、評価された。(先川ひとみ)

全国の研究者の論文68本を4人 踏まえ、18年は停電で全ての暖房の寒地研究の専門家が審査し、寒が停止した想定で実施した。地技術賞3部門の3本を選んだ。根本教授の受賞は、2015年の同賞地域貢献部門に続き2回目。冬の避難所運営訓練は自治体関係者や学生が参加し、同大が10年から毎年行っている。15年の訓練では、換気が必要なポータブルストーブを使うと、二酸化炭素の濃度が高まる危険性を把握。これを

「ブルーシートなどで閉鎖空間」「シェルター」を設け、段ボールベッドと寝袋を使うと「最低限の暖かさを保てる」ことが分かった。ただ、参加者の半数が「寒くて寝れない」などと訴えた。

根本教授は、こうした暖かさを保つ方法の効果と課題を論文に執筆。過酷な状況を設定し、最低限

## 暖かさ保つ方法検証



寒地技術賞を受賞した日赤道看護大の根本昌宏教授

の避難所運営はどうかあるべきか示した点が評価された。

根本教授は「受賞は、行政の冬の災害計画に私たち研究者の意見を反映してほしいという思いの現れだ。厳冬期は助かったはずの命が奪われたり、健康被害を訴える願っている。」

人が間違ひなく増える」と力を込める。

10月の台風19号で被災した長野県では、根本教授のアドバイザーもあり、自治体が避難所に換気できるFF式ストーブを設置し、電気毛布を配るなど、避難所運営に変化が見えるという。

根本教授は暖かさを保つ研究成果が、さらに広く浸透することを願っている。